

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-161	12-031	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Multi-level analysis of alcohol-related injury and drinking pattern: emergency department data from 19 countries. 飲酒に関連した怪我と飲酒パターンの多方面の分析より 19 カ国の救急部門のデータより		
執筆者		
Cherpitel CJ, Ye Y, Bond J, Borges G, Chou P, Nilsen P, Ruan J, Xiang X.		
掲載誌		
Addiction. 2012 Jul;107(7):1263-72.		
キーワード		
傷害、飲酒、飲酒パターン、救急部門		
要 旨		
目的: 外傷は飲酒をともなう行事においておこり、通常の飲酒習慣もまた外傷の起きる重要な要因であろう。そこで個々人の日常の飲酒に関連した外傷と個人の日常の飲酒習慣との関連について検討した。		
方法: アルコール関連の外傷について過去 12 ヶ月のアルコール消費量、集団レベルでの有害な飲酒パターン、アルコールに関する政策を考慮して線形回帰モデルを用いて検討した。19 カ国の救急外来のデータ及び、ほぼ同様の方法論に基づいた 3 つの飲酒と外傷に関する共同研究のデータを解析した。46 の救急部門における 14132 名のけがをした飲酒者を対象とした。アルコール関連の外傷は、自己申告による飲酒後の外傷、血中アルコール濃度は 0.08 g/100ml(0.8mg/ml)以上 (アメリカではこの値を超えると酔っているとみなされる。日本の飲酒運転の基準値は 0.3mg/ml 以上)、あるいは飲酒によって怪我をしたとの自己申告の3つにわけられた。		
結果: 個人の普段の飲酒量は 3 つのいずれの基準によってもアルコールによる外傷の強い予測因子であった。普段の飲酒パターンは飲酒量を調整するとアルコールによる外傷の予測因子であった。飲酒パターンでは機会あるいは頻回の大量飲酒はその他の飲酒パターンより強いアルコールによる外傷の予測因子であった。個人の普段の飲酒量と飲酒パターンを調整した場合、集団レベルでの有害な飲酒パターンはアルコールによる外傷の有意な予測因子ではなかった。アルコールに関する政策はアルコール血中濃度と自己申告による飲酒による怪我 (強いアルコール政策はアルコール関連外傷の低い発症率であった) の予測因子であった。		
考察: 日常の飲酒量及び大量飲酒はアルコールによる外傷と独立して関連した。アルコール対策政策を持つ国ではアルコールによる外傷の発生率は低い傾向をしめした。		